

外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部
外国語教育基礎研究部会 第 5 回年次例会
発表プログラム・予稿集



日時 2018年2月17日(土) 10:30-18:00

会場 愛知学院大学 名城公園キャンパス

〒462-8739 名古屋市北区名城 3-1-1

主催 外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部 外国語教育基礎研究部会

協賛展示 センゲージ ラーニング株式会社 (<http://cengage.jp/>)

リアリーイングリッシュ株式会社 (<http://www.reallyenglish.co.jp/>)

例会サイト: <http://bit.ly/Kisoken2017>

Twitter ハッシュタグ: [#kisoken2017](https://twitter.com/kisoken2017)



お問い合わせ先:

外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部

外国語教育基礎研究部会 事務局

田村 祐 (名古屋大学大学院生)

yutamura@nagoya-u.jp

ごあいさつ

第 5 回年次例会に寄せて

西村 嘉人

外国語教育メディア学会(LET)中部支部 外国語教育基礎研究部会 部会長・名古屋大学大学院生

本日は、外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会(以下、基礎研)の第 5 回年次例会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

昨年度、基礎研の年次例会は、運営の都合上 12 月に開催しましたが、今年度はこれまで通り 2 月に年次例会を開催する運びとなりました。また、本年度の例会は、今年の 9 月を以て芸能界の引退を発表している安室奈美恵さんのコンサート開催日と重なり、宿泊場所の確保が困難となってしまうなど、参加者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしていることをお詫び申し上げます。

本日の会場となっている愛知学院大学名城公園キャンパスは、交通アクセスも良く、そして綺麗なキャンパスであります。このような素晴らしい会場を、私ども基礎研の年次例会会場として使用できるようご配慮くださった、愛知学院大学の川口勇作先生に、心より感謝申し上げます。また、会場の使用にあたって、センゲージラーニング株式会社様のご援助をいただいております。御礼申し上げます。

さて、今年度の例会は、午前中から午後の前半にかけて、院生・若手研究者による座談会を開催し、その後は自由研究発表、夕方からは基調講演と、盛りだくさんの内容となっています。「若手によるキャリアパス座談会」では、「学校教員志望の部」と「大学教員志望の部」と題した 2 つの座談会をランチ形式で開催します。学校教員志望の部では、現役の中学校教員である福田朱莉先生と、学校教員を志望する愛知教育大学大学院生の押見奈美さんにご登壇いただき、若手のうちに身に付けておくべきスキル・知識・人間関係や大学院進学の意味の共有などについてフロアと一緒に議論し、明日の英語教育について考えていきたいと思えます。「大学教員志望の部」では、現役の大学教員として、広島大学の草薙邦広先生と共栄大学の名畑目真吾先生に、大学教員を志望する大学院生として、広島大学大学院の梅木璃子さんにご登壇いただき、今日の多様な雇用形態を踏まえた上で、どのようなポジションにはどのようなキャリアがありうるのかを考え、フロアと一緒に外国語教育研究の今後について考えを深めていきたいと思えます。自由研究発表枠では、3 本の発表があります。発表者の方々にとってこの機会が有益なものとなるよう、活発な質疑が行われることを期待しています。

夕方の基調講演では、神戸大学の石川慎一郎先生をお招きし、先生の院生時代の研究からこれまでの研究について、文学・文体論・心理言語学・コーパスをからめて、カジュアルに振り返っていただきます。ご期待ください。なお、本例会の基調講演につきましては、リアリーイングシツリユ株式会社様のご援助をいただいております。御礼申し上げます。

私ども基礎研も、発足から 5 年目を迎えました。発足当初からは運営に携わるメンバーも大きく変わりましたが、それでも週例会と称した勉強会を毎週開催し、こうした年次例会の開催、年度ごとの報告論集の発行を行えていますのも、ひとえに皆様のあたたかいご支援のおかげと、心より御礼申し上げます。基礎研は大学院生が中心となって運営しております故、至らぬ点も多々あるかとは思いますが、皆様のご期待に沿えるよう、これからも邁進してまいりますので、今後とも変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

プログラム

10:30-

受付(アガルスタワー4階 2402 教室前)

10:40-

開会式(アガルスタワー4階 2402 教室)

司会： 原 和久 (岡崎女子短期大学非常勤講師)
挨拶： 西村 嘉人 (外国語教育基礎研究部会 部会長)

11:00-13:50

若手キャリアパス座談会(アガルスタワー4階 2402 教室)

11:00-12:10

学校教員志望の部(ランチオンセッション)

司会： 石井 雄隆 (早稲田大学)
登壇者： 福田 朱莉 (岡崎市立矢作北中学校)
 押見 奈美 (愛知教育大学大学院生)

英語教育を巡っては、英語コアカリキュラムの策定や2020年大学入試改革など様々な改革が現在進められています。若手キャリアパス座談会「学校教員志望の部」では、英語教育を巡る社会的状況を踏まえながら、現職の中学校の先生と教員志望の大学院生をお招きし、「院生自体に思っていたことと勤務して分かったことのギャップ」、「教員になった後、自分が大学院で行った研究やその他の活動で教員の仕事に活かされている部分」などの共有を通しながら、若手のうちに身に付けておくべきスキル・知識・人間関係や大学院進学の意義の共有などについてフロアと一緒に議論し、明日の英語教育について考えていきたいと思えます。

12:30-13:50

大学教員志望の部(ランチョンセッション)

司会： 田村 祐 (名古屋大学大学院生)
登壇者： 草薙 邦広 (広島大学)
名畑目 真吾 (共栄大学)
梅木 璃子 (広島大学大学院生)

近年、英語教育業界の情勢は目まぐるしく変化しており、この業界を担っていく若手の将来も必ずしも明るいとは限りません。幸い、私たちの分野は他分野に比べれば「語学教員」として大学に就職することはさほど難しいキャリアパスではないかもしれませんが。しかしながら、こうしたキャリアは必ずしもアカデミックなキャリアパスであるわけではなく、教育職と研究職の差別化はどんどん進んでいくかもしれません。研究面に目を向ければ、英語教育研究は学際化が進む一方で、大学入試改革や小学校英語の教科化などの「教育改革」にも私たちは否応なく巻き込まれ、研究者として、あるいは学会としてそうした情勢を無視することもできなくなっていくでしょう。そんな中で、若手は何を身に着け、どこに向かって、将来像を描いて進んでいけばよいのか。現在大学院で学ぶ院生や大学院を修了して「現場」で働く大学教員の先輩方と考えを深めていけたらと思います。

14:00-15:30

研究発表(アガスタワー4階 2402教室)

14:00-14:30 実証研究

英語母語話者及び日本人学習者の英語発話における非流暢さの比較1
小林 真実 (名古屋大学大学院生)

14:30-15:00 実証研究

「タスクの複雑さ」は認知的負荷を高めるか

:学習者の主観的なタスクの困難度の観点から2

岩谷 真悠 (名古屋大学大学院生)

15:00-15:30 展望

認知的アプローチに基づくパフォーマンス指標解釈の問題点

:存在論的アプローチによる批判的検討3

福田 純也 (静岡大学)

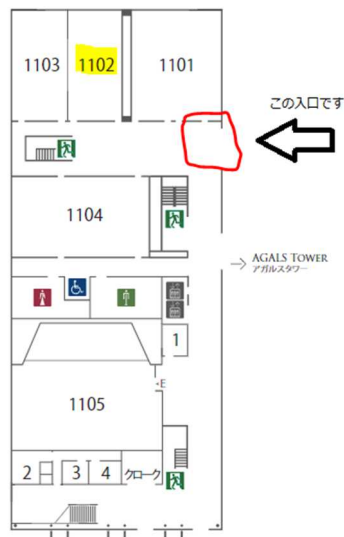
西村 嘉人 (名古屋大学大学院生)

田村 祐 (名古屋大学大学院生)

15:30-16:00

移動(アガルスタワー4階 2402 教室→キャッスルホール 1階 1102 教室)

アガルスタワー4階からエスカレーターまたはエレベーターで1階へ降りていただき、キャッスルホール1階の解錠されている奥側の入り口より建物内へ入り、1102教室へ移動していただきますようお願いいたします。



16:00-17:30

基調講演(キャッスルホール 1階 1102 教室)

講師紹介: 西村 嘉人 (名古屋大学大学院生)
提供: リアリーイングリッシュ株式会社
<http://www.reallyenglish.co.jp/>

言語の可視化をめぐる こころと言葉の交響

講師: 石川 慎一郎 (神戸大学)

神戸市出身。兵庫県立長田高等学校卒業。神戸大学文学部文学科英米文学専攻課程卒業。神戸大学大学院文学研究科英文学専攻修了。岡山大学大学院文化科学研究科人間社会文化学専攻・国際文化論大講座・言語文化論分野修了。博士(文学)。神戸大学全学基盤系教育基盤域教授。専門は、応用言語学、コーパス言語学、言語教育学ほか。全国英語教育学会学会賞、大学英語教育学会学術賞、中部地区英語教育学会学会賞、英語コーパス学会学会賞受賞。主な著書に、『英語科授業の今日的課題』(金星堂、1997)、『JACET List of 8000 Basic Words』(大学英語教育学会、2003)、『言語研究のための統計入門』(くろしお出版、2010)、『ベーシック コーパス言語学』(ひつじ書房、2012)、『ベーシック応用言語学:L2 の習得・処理・学習・教授・評価』(ひつじ書房、2017)など。

先日、あるサイト上で自分自身が「第 2 言語習得論の研究者」と紹介されていることを知った。自分ではそのように考えたことはただの一度もなかったのに、ずいぶん驚いたのだが、一般に、研究者には何らかのラベルが張られることが多い。「**の研究者」「**の紹介者」「**の大家」といったものである。では、私なら自分自身にどんなラベルを張るか考えてみるのだがこれが意外に難しい。

私の卒業論文のテーマは「ディラン=トマス詩論：初期詩群におけるヴィジョン・メイキングの過程の一考察」であった。先般、ノーベル文学賞を受賞したボブ=ディランの名前の由来にもなったトマスの詩は、初めて読むと、何のことを言っているのかまったくわからない。しかし、英語があまり読めない東洋の若造でも、トマスの言葉が暴力的なエネルギーを持っていることだけは即時に理解できた。

トマスの詩に限らず、言葉には、意味がわからないのにここだけは確実に伝わる、といったことがよく起こる。そんな不思議なことがなぜ起こるのか、これが私の抱いた最初の疑問だった。あるテキストについての「なぜ」を説明するには、そのテキストの外の言葉や枠組みを使う必要がある。学生時代の私は、主に 2 つの枠組みで問題を考えるようになった。1 つは当時の哲学界を風靡していたフランス発のディコンストラクション理論で、もう 1 つは言語学、とくに文体論や機能文法などの枠組みである。ディコンストラクションでは、テキストを自立的にとらえ、テキストの意図をテキスト自身が裏切る（脱構築する）メカニズムに着目する。文体論では言語がある特定の効果を生じる仕組みの解明を目指す。文学の先生と哲学の先生と言語学の先生に同時に師事するという、今ではあまり見られない融通無碍な学生生活を送りながら、目に見えない言葉の機能を可視化する、というテーマにずっと向き合ってきた。その後、研究者になり、心理言語学の各種の実験手法や、脳機能測定、また、コーパス分析など、「なぜ」に接近する道具立てはいろいろ変わってきたが、問いそのものは今も昔も変わらない。それは私にとっていつまでも提出できない「宿題」のようなものである。

17:30-17:40

閉会式(キャッスルホール 1 階 1102 教室)

司会： 原 和久（岡崎女子短期大学非常勤講師）

挨拶： 西村 嘉人（外国語教育基礎研究部会 部会長）

18:00-20:00

懇親会

会場： GARB CASTELLO

〒462-0846 愛知県名古屋市北区名城 1-4-1 名城公園内 tonarino 1 階

外国語教育メディア学会(LET)外国語教育基礎研究部会第5回年次例会
若手キャリアパス座談会における参加者間のコメント共有について
—「TodaysMeet」の活用案内—

若手キャリアパス座談会では、登壇者と参加者の皆様が感想・コメント・質問を共有するツールとして、「TodaysMeet」を活用してみたいと思います。座談会を聞きながら、個々の登壇者に質問したいこと、全員に聞いてみたいことなどを自由に投稿して下さい。「TodaysMeet」のコメントを確認しながら、進行しようと思っております。

投稿手順

1. お手持ちのスマートフォンやタブレット端末、PCを準備
2. 次のURL(もしくはQRコード)を入力し、アクセス

URL

<https://todaysmeet.com/20180217>

QRコード



3. 自身が使用する「Nickname」を任意に決めて「Join」
4. 「Message」にコメントを入力して「Say」(140文字以内でお願いします)。特定の先生への質問であれば、それが分かるようにして下さい(例:福田先生に質問ですが、…)。
5. 「Listen」に自身のコメントがアップされたのを確認

参加者の皆様にも積極的にご参加いただければと思います。たくさんコメントをお待ちしております。

事務局から

協賛展示について

アガルスタワー4階会場前は、センゲージラーニング株式会社様とリアリーイングリッシュ株式会社の展示スペースとなっております。休憩時間等にぜひお立ち寄りください。

本日のお食事について

今回大会では、若手座談会をランチオン形式で開催いたします。ご昼食をご持参くださいますようお願い申し上げます。当日は、キャンパス内のコンビニ(サークル K)が営業しています。また、懇親会場がある tonarino にはスターバックスコーヒー、DEAN&DELUCA(カフェ)、ローソンが入っています。飲料の自動販売機はアガルスタワー1階入り口の外の喫煙所内にあります。

懇親会について

本日の例会終了後、18時00分より懇親会を開催いたします。受付にて参加のお手続きをお済ませください。例会終了後に担当者が会場までご案内いたします。

週例会について

学期中の毎週、「週例会」と称して勉強会を開催しており、研究発表や文献の輪読を行っております。今年度は、18時15分より、名古屋大学にて開催しておりました。どなたでもご参加いただけますので、関心のある方は事務局までお気軽にお問い合わせください。

基礎研 Facebook ページについて

基礎研では、Facebook ページを運営しており、週例会の活動報告やイベントの告知を行っております。Facebook のアカウントをお持ちでない方もご覧になれますので、ご関心のある方は、右の QR コード、もしくは下の URL からアクセスの上、「いいね」をお願いいたします。 <https://www.facebook.com/letkisoken/>



基礎研 研究相談フォーラムについて

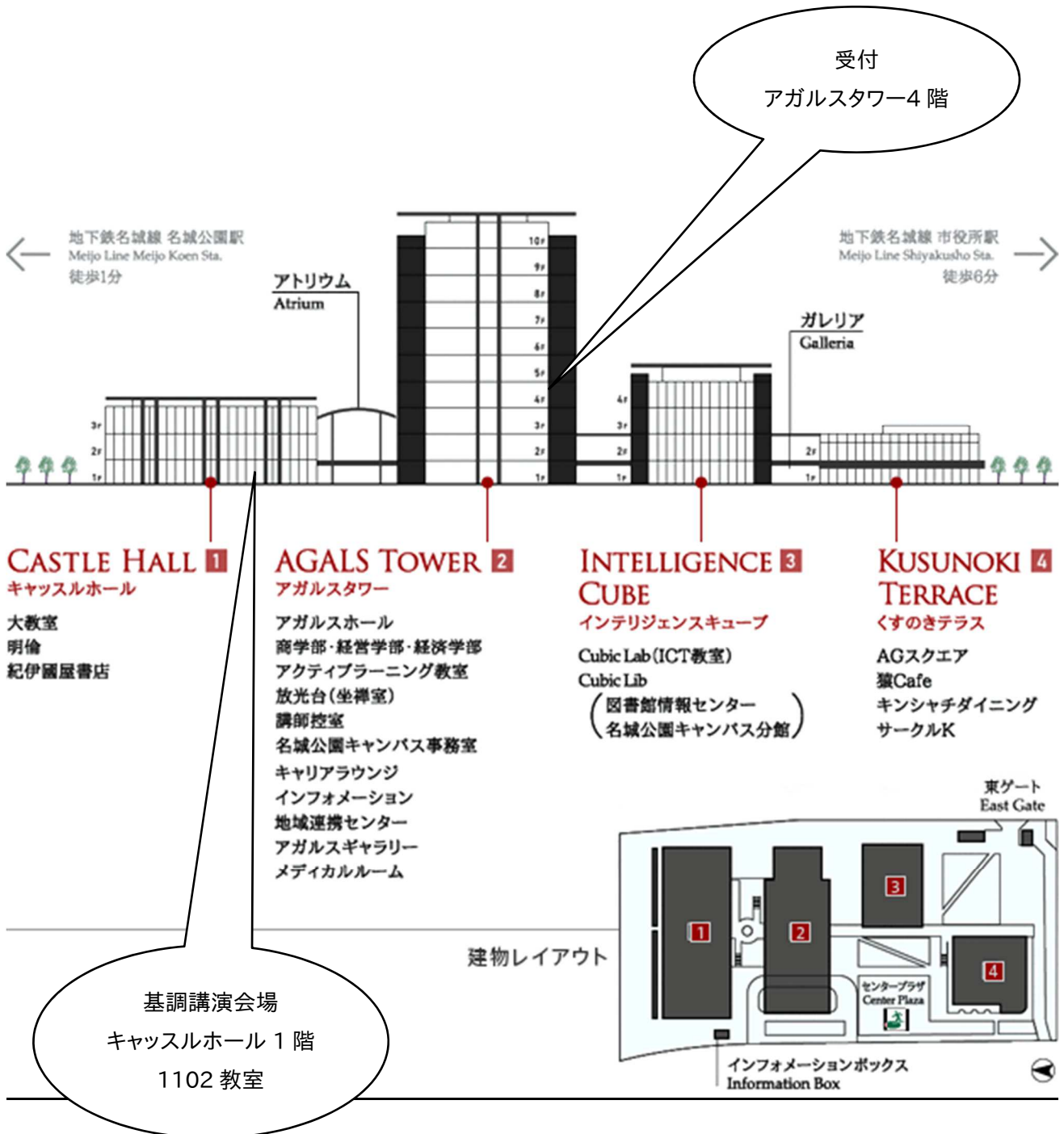
基礎研では、外国語教育研究についての質問や相談を行う場として、「基礎研 研究相談フォーラム」を運営しております。研究内容や研究方法についてお悩みの方なら、どなたでも投稿いただけます。ぜひご利用ください。 http://9326.teacup.com/kisoken_forum/bbs/t1/150

外国語教育基礎研究部会 報告論集について

基礎研では、年に一回、オンライン上で報告論集を発行しています。今年度も投稿のお申し込みを受け付けます。今年度の投稿締め切りは、3月18日(日)です。投稿にかかる詳細や、投稿規定、テンプレート、および過年度の報告論集は、LET 中部支部サイト上の研究部会ページにて公開しております。

<http://bit.ly/Kisoken>

会場案内図



一般発表

予稿

英語母語話者及び日本人学習者の英語発話における非流暢さの比較

小林 真実
名古屋大学大学院生

Keywords: スピーキング, 非流暢さ, 談話標識

1. はじめに

学習者による英語スピーキングにおける非流暢さ及び談話標識は、文中の発生箇所により、発話内容や語彙的及び統語的符号化のどの段階において困難を感じているか推測できるとされている (Götz, 2013; Kormos, 2006)。本研究では英語母語話者と日本人学習者の英語スピーキングにおける非流暢さ及び談話標識の発生箇所を検証する。

2. 本研究

NICT JLE コーパスの Stage 3 (ロールプレイ) の英語母語話者及び日本人学習者の各 20 件の会話を使用し、母語話者と学習者の発話における非流暢さ (無声及び有声ポーズ, 言い直し, 同じ単語の繰り返し) と, 談話標識の内, 意味を持たないもの (well, you know, I mean) の発生箇所を検証した。非流暢さ及び談話標識について, 節と節の間 (between-clause) で発生するものと, 節の途中 (mid-clause) で発生するものの総語数に対する発生数の割合を比較した。

3. 結果・考察

ポーズは, 節中と節間において日本人学習者の発話では英語母語話者と比して多かった。言い直しは, 総発生数は日本人学習者が多かったが, 接頭の言い直しは両群において同様であるのに対し, 節中の言い直しは日本人学習者に多くみられた。同じ単語の繰り返しは, 総発生数, 接頭及び節中において日本人学習者が多かった。また談話標識は, 英語母語話者の発話では発生しているのに対し, 日本人学習者の発話において殆どみられなかった。

節と節の間に発生する非流暢さや意味を持たない談話標識は, 発話内容を考える為のものであるとされている一方で, 節の途中で発生するものは言語的なものであり, 語彙的及び統語的符号化における困難さを表すものとされている (Götz, 2013; Kormos, 2006)。結果より, 日本人学習者は英語スピーキングにおいて, 発話内容の生成だけでなく語彙的及び統語的符号化の困難さを感じており, それにより非流暢さと談話標識が発生している事が示唆された。

参考文献

- Götz, S. (2013). *Fluency in native and nonnative English speech*. Amsterdam: John Benjamins.
Kormos, J. (2006). *Speech production and second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

「タスクの複雑さ」は認知的負荷を高めるか —学習者の主観的なタスクの困難度の観点から—

岩谷 真悠
名古屋大学大学院生

Keywords: スピーキング, タスクの複雑さ, タスクを用いた教授法 (TBLT)

1. はじめに

TBLT に用いるタスクを選択する際、考慮すべきタスクデザインの要因の一つとしてタスクの複雑さがある。タスクの複雑さは、タスクがどれだけ複雑か・あるいは単純かというタスクの複雑度合いであり、条件に従ってタスクを操作し(task manipulation), 学習者に認知的負荷を与えることで、タスクの難易度を調整することができるとされている。これまでの多くの研究では、研究者が理論的要因に従って複雑さを操作したタスクを学習者に課し、タスクを行った学習者の言語パフォーマンスに関する考察が論じられてきた。しかし、そのような手法では、タスクのデザインは研究者による操作のみで、タスクが実際に複雑であったことが確認できない。よってタスクを行った学習者のパフォーマンスの特徴が、タスクがデザインとなって表れたものであるということを裏付ける証拠が不十分である。そこで本研究では、理論的要因によって複雑化したタスクが実際に認知的負荷を高めるのかを、日本人英語学習者の自己評価による主観的なタスクの困難度を測定することで検証することを試みた。

2. 研究課題

研究課題は、単純なタスクと複雑なタスクにおいて、日本人英語学習者のタスクの困難度に差はあるか、である。

3. 実験参与者及び使用したタスク

実験参与者は、日本語を母語とし、英語を学習する大学生・大学院生 40 名、TOEIC スコアは 400~965 で、スコアの平均は 745.4 ($SD = 167.9$) であった ($n = 31$)。

タスクは Heaton (1975) の 4 コマ漫画の内容を描写するナラティブタスクで、難易度の異なる 2 種類のタスクを用意した。タスクの難易度の操作は、土説明する要素の数 (Robinson, 2001) の他、ストーリーラインの分かりやすさ・ストーリーラインの複雑さ・親密性・コードの複雑さの 5 つの要因によるものである。学習者による主観的なタスクの困難度の測定には、Sasayama (2016) を基に、7 段階のリカート尺度を用いた (1: とてもやさしい - 7: とても難しい)。

4. 結果・考察

単純なタスクと複雑なタスクにおける学習者のタスクの困難度の評価値を対応ありの t 検定を用いて比較したところ、有意差はなかった。このことから、本研究結果からは、タスクの複雑さを操作しても、認知的負荷が高まっていない可能性が示唆された。しかし、本研究では、タスクの要求する認知的負荷を、学習者の主観的なタスクの困難度を測定することでしか行っていない。よって、今後タスク研究における認知的負荷の測定には、本研究で用いた学習者の主観的な評価による測定具を単一に用いるのではなく、より認知的側面を直接的に図ることのできる測定具を組み合わせ、多面的に測定する方法がよいと考えられる。

参考文献

- Heaton, J. B. (1975). *Composition through pictures*. Essex: Longman.
Robinson, P. (2001). Task complexity, task difficulty, and task production: Exploring interactions in a componential framework. *Applied Linguistics*, 22, 27–57.
Sasayama, S. (2016). Is a “complex” task really complex? Validating the assumption of cognitive task complexity. *Modern Language Journal*, 100, 231–254. doi:10.1111/modl.12313

認知的アプローチに基づくパフォーマンス指標解釈の問題点 —存在論的アプローチによる批判的検討—

福田 純也・西村 嘉人・田村 祐

静岡大学・名古屋大学大学院生・名古屋大学大学院生／日本学術振興会特別研究員

Keywords: 複雑さ・正確さ・流暢さ, 存在論的アプローチ

1. はじめに

学習者のパフォーマンスを「複雑さ・正確さ・流暢さ」(CAF)に分類して分析し、学習者のパフォーマンスの背後にある認知プロセスを探るという方法は、これまでの研究で数多く行われてきている。本発表は、この方法に内在するいくつかの危険性を指摘するものである。

2. パフォーマンス分析による認知プロセス特定の危険性

本発表では、CAFの存在論的な実在性を問い直し、CAFはその成立背景から総括的モデルに属すが反映的モデルとして捉えられてきたという理論的な「ねじれ」を指摘する。そして近年の有力な見方のひとつとして複雑性理論の観点を取り上げ、CAFを複雑系から創発する表面的な現象と捉えることを試みる。そして、そのような観点から見て立ち現れる二つの問題点、すなわち(1)指標選択の恣意性に関する問題と、(2)テキスト情報と能力および認知プロセスの同一視に関わる問題を取り上げ議論する。これらの考察をもって、パフォーマンス分析から認知プロセスの特定を行うこと試みは、科学的知識の収束を阻害するといった根本的問題を持つことを指摘する。

3. 総括

最後に、本発表では現時点で考えうる解決策として、総括的・反映的モデルの異なり(e.g., Borsboom Mellenbergh, & van Heerden, 2004)とその適応範囲に注意することや、パフォーマンス指標を包括的に捉え、その構造をネットワークとして記述すること(Schmittmann et al., 2013)、および、科学的实在論の議論(e.g., Cartwright, 1983; Hacking, 1983)に基づき構成概念を仮定する際の判断基準について精緻な議論を行うことなど、いくつかの考えうる方向性について先行研究を参照しながら提案したい。

参考文献

- Borsboom, D., Mellenbergh, G.J., & van Heerden, J. (2004). The concept of validity. *Psychological Review*, *111*, 1061–1071.
- Cartwright, N. (1983). *How the Laws of Physics Lie*. Oxford: Clarendon Press.
- Hacking, I. (1983). *Representing and Intervening*. 渡辺博訳 (1983)『表現と介入—ボルヘスの幻想と新バーコン主義』, 産業出版
- Schmittmann, V. D., Cramer, A. O. J., Waldorp, L. J., Epskamp, S, Kievit, R. A., & Borsboom, D. (2013). Deconstructing the construct: A network perspective on psychological phenomena. *New Ideas in Psychology*, *31*, 43–53.